
～ ～ アルセス ～ ～ 神々の物語

義成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～アルセス～ 神々の物語

【Nコード】

N0625I

【作者名】

義成

【あらすじ】

本当の自分とは何か？その答えを探すため、少年は異世界へと旅に出た。戦禍の中のその世界で、少年は仲間や人々と出会いながら、本当の自分を探し続ける。そして、少年は偉大なる神と出会う…。

プロローグ（前書き）

えゝ…どうもお初にお目にかかります。義成と申します。

この小説はですね。義成が初めて書いた小説です。

それをところどころ改訂して、新しく書きました。

結構気で書いてます。この小説。

かなり読みにくく、面白みの無い文章になっていますが、読んで頂ければ幸いです。

では！お楽しみ下さい！

ブログ

我々は旅人だ。

休むことなく、人生という終わりになき旅を永遠と続ける墓なき旅人だ。

彼らの目的とはただ一つ。

真の自分とは何かを捜すこと。

ほとんどの旅人たちが、その目的を成し遂げることなく、その問題を答えることなく、旅の途中で散っていった。

それはどんな賢者でも、決して答えることのできない問題。

決まった答がない、人生の旅人たちの、永遠の問題。

これはそんな永遠の問題を解く人の、旅と戦いの物語。

ブログ（後書き）

随時感想、ご意見、ご要望、評価をお待ちしています！

また自分が書いているポケモン小説の方もよろしく願います！

変わらない日常（前書き）

うん…この章はひどいです…。

この小説の原本無くしちゃいまして…初めから作り直しました…。
何とぞご容赦下さい。

変わらない日常

運命は、自分の予想だにしないところでいつも動いている。誰にもその動きを変えることはできないし、察知することさえできない。

「おい……。起きろ……。」

半ば飽きれ気味な教師が、机に突っ伏している少年に言った。授業の始め頃から、ちよくちよく注意をしているのだが、この少年は全く相手にしようとはせず、ひたすらに睡眠に徹している。クラスの席で言う一番前の教卓の真ん前であるのにも関わらずに、だ。

教師がチョークを投げつけたり、教科書でぶん殴ったりしても、身動き一つしようとしなない。

まさに鉄壁……と言うべきか。無駄だと分かっているながらも、自分の職務を全うするためには仕方がない。再び意を決して（無駄だと分かっている）少年に再び注意しようとしたその時だった。

無情にも、その時間の、そして今週の授業の終了のベルが鳴り響いた。

「…。

今週はここまで…。

起立…。」

鉄壁を最後の最後まで崩すことができなかった…、その無念の思いを胸に抱きながらも、教師は授業の終了を告げた。

「それにしてもケイ。よく寝てたよね。」

「うるせえ。授業中寝て何が悪い!」

「いや…重罪だよ…」

ようやく今週の授業が全て終わり、待ちに待った七日間の連休を前に、教室内は授業中とは違った雰囲気漂っている。

さっきまで寝ていた少年は、大きな伸びをすると、席から立ち上がり、ドアに歩いて行った。

「ケイ。どこ行くの？ショートホーム始まるよ。」

「便所だよ。ジュンも来いよ。」

そういうと少年はどんどん教室の外に出て行ってしまった。

ケイと呼ばれる少年の名前は、白河啓一。そして、ジュンと呼ばれる青年は、片岡潤。両方ともこの浦佐高等学校に通う、高校二年生だ。

二人は小学生の頃からの友人同士であり、ジュンの方は、いつも暴走気味である啓一のストッパー役、そして啓一の方は、アイドル顔で優しそうな潤のさながら用心棒のような役柄。互いに持ちつ持たれずの関係である。

「でもほんとにケイよく寝てたよね。チョークをぶつけられても、

教科書で殴られてもびくともしなかったし。」

「疲れてんだよ。」

啓一はそういいながら、大きな欠伸^{あくび}を噛み殺した。

二人は用をたし、のんびりと廊下を歩いていたときであった。

「ケイ！！ジュン君！！もうショート始まるよ！！！」

教室の中から、髪を少し短く切った、活発そうな少女が窓から顔を出している。

「ケイ。サクラさんが呼んでるよ！」

「ほつとけ。めんどくさいから。」

「…ほつといた方がめんどくさいですよ。」

二人の間で何とも言えない沈黙が流れる。

啓一はため息をつく、教室に向かって若干速足で歩き始めた。

「くっそサクラの奴。馬鹿だろ！！」

「仕方ないでしょ。ケイが掃除サボるんだから。」

「だからって辞書ぶん投げるか？下手すれば殺人事件だぞ！！」

あのあと、学校のショートホームが終わり、放課後に掃除があつたのだが、啓一はそれをやらずに帰ろうとした。そして、先程教室の中から呼び掛けてた少女にどつかれ、そしてその少女が勢い余って投げた英語の辞書が啓一の顔面にクリーンヒットした。当然ながら、鼻から真っ赤な鮮血が出たので、今現在鼻にティッシュを詰めた、何とも間抜けな格好になっている。

「ところでさ。ケイ。」

「あ？どうした？急に改まって。」

ケイは鼻声で、急に改まったジュンに聞き返した。

「神隠しってほんとにあると思う？」

「なんだよいきなり…。今起こってる事件のことか？」

「そう…。」

ケイが口に出したあの事件とは、この平和な浦佐市を今騒がしている、連続誘拐事件のことである。

この浦佐市は人口は二十万を超えているが、気候は温暖で自然は豊か。大変暮らしやすい町である。

そんな浦佐市に今、不可解な事件が起こっている。正式名、浦佐市集団失踪事件。別名神隠し。

それは、何の係わり合いの持たない、年齢もバラバラの男女十人が、一斉に行方不明になると言う物だ。

地元警察は、カルト集団の関連が強いと見て捜査を開始したが、全くと言っていいほど手掛かりがない。

さらに、警察が捜査を始めてわずかに一日後。その十人がひょっこり、何事もなかったかのように帰ってきたのだ。

体は健康そのもの。逆に元より健康になった者もいた。

そしてその失踪者が口を揃えて言う言葉が、警察をさらに困惑させた。

『知らない酔っ払いに会った。』

その十人は警察の事情聴取に、まるで録音したかのように、一語一句間違えることなく言った。警察はその酔っ払いの正体を掴むべく、捜査を再開したが、事件と同じく全く手掛かりを掴むことができない。

それどころか、日に日に行方不明者の数は増えて行き、今ではすでに五十人を超えており、警察もすでに市民全体に注意を呼びかけることしか手立てがない状態だ。

「だいたいな。神隠しなんて、技術が発達した今の時代にあるわけないだろ？
今は何時代だ？」

「平成…。」

若干怒り気味な啓一に気圧され、潤は弱々しく言った。

「だろ？今平成。

元禄とかじゃないんだから。
きつとメディアの策略だよ。」

「そう…なのかな…？」

「ああ。

あんまり気にしてるとお前が今度さらわれちゃうぞ。」

「そう…だよね…！
僕、次右だから！」

「ああ。じゃあな…！
俺基本暇だから、いつでもメールくれよ。」

「同じく。」

二人はそういうと二人で微笑した。

「んじゃ。良い長期休暇を。」

「んじゃね！」

二人は別々の道に別れた。

ふと啓一は、去っていく潤の後ろ姿を見た。

何故見たかは分からない。ただ啓一は、これから長い間、潤と会うことが出来ないような気がしたからだ。

啓一は、そんな思いを振り払うようにして、自分の家へと歩いていった。

変わらない日常（後書き）

用語解説

ショートホーム、ショート

学校の帰る前、朝の授業前に行く、その日の連絡事項を担当から聞く時間。

連絡事項がない場合は省かれることが多く、また話好きでユーモアがある担任だと、だいたいが無駄話で終わる場合がある。

ちなみに帰りのショートでは、部活従事者や、早く帰りたい者の「早くしろ」という呟きが飛び交うことが多い。

酔っ払い

とある住宅街の中に、一際目立つ立派な門構えの家がある。
その家の中に、啓一は入っていった。

家の中に入った啓一は、脇目も振らずにただ一直線で自分の部屋に向かった。

微かに、リビングの方からテレビの音が聞こえるが、気にすることもなく階段を駆け上がる。

そして、自分の部屋のドアに貼付けてあった一万円札を勢いよく剥がすと、そのまま自分の部屋の中に入った。

啓一の部屋の中は全くと言っていいほど飾り気と言つものがない。

簡潔に言えば殺風景なのだ。
あるのは戸棚一つと、勉強机、そして睡眠をとるためのベッドぐらいなものだった。

啓一はそんな殺風景な部屋の中で、戸棚の上にあった、一際目立つ一枚の写真立ての前に立ち、静かに手を合わせた。

啓一が中学三年ぐらいの頃、彼は両親と、自分の小学生の妹を一度に亡くした。

原因は、トラック運転手の信号無視による交通事故。

その日は、啓一が学校で所属していた剣道部の県大会の決勝戦だった。

啓一は、見事県大会優勝。その啓一に届いたのは、祝福の言葉ではなく、顧問からの訃報だった。

結局家族の遺体には会わせてもらえず、最後に再会したのは三つの小さな骨壺になった三人だった。

だが、啓一の悲劇はまだ終わらない。

その後、一人になった啓一を誰が預かるかで、親族の間で対立。たらい回しにされる日々が続いた。

結局のところ、啓一の希望により、中学の友達が多くいる地域の、親戚のもとに留まることになった。

しかし、その親戚は啓一を歓迎せず、まるで空気のように啓一を扱った。

そして啓一は決めたのだ。

——自分はもう自立ったことなんかはしない。自分は空気になると。

啓一は、今までの幸せな生活から打って変わった生活を苦に思い、自殺まで考えたこともあった。しかし、そんな彼を支えたのが、周囲の彼の友人であり、親友の潤であり、サクラであった。

彼の支えがあつて、一時自殺未遂を繰り返した啓一は、今はここまですでに立ち直ることができた。

だが、あの日とつた県大会のトロフィーなどは全て叩き割り、昔の活発だった自分とは一線を引いているのは変わらない。

立ち直った今現在でも、それは変わってはいなかった。

「んあ……。そろそろ夕飯買いに行くか。」

部屋の中に差し込む夕日も、徐々にオレンジ色が強くなっていく。

啓一は、机の上にあった一万円札を掴みとり、今日の夕食獲得のために、夕日に照らされる町へと繰り出していく。

それが、自分の人生を変えることになるとは、啓一は分かっていなかっただろう……。

啓一は、もう夕日の暮れかかっている町を自転車でゆっくりとこいでいた。カゴの中のコンビニ袋が、段差などでぐらぐらと揺れ、飛び上がる。

しばらく自転車を走らせると、行くときにはなかった、あるものに気が付いた。

（うわぁ…酔っ払いいるよ…。
絡まれないように避けて通ろう。）

啓一の目の先には、道端の地べたに座り、酒の瓶を煽っていた一人の酔っ払いがいた。

（さっき通ったときにはいなかったのにな…。）

啓一の頭の中には、昼間学校で聞いた神隠しのことが一瞬浮かんだが、それはシャボン玉のように弾けて消えた。

（神様なんかいるはずない。とにかく早くここ抜けよ。）

啓一がそう決め、まさに今、酔っ払いの目の前を通り過ぎようとしたその時だった。

「おい。そのの。ちょっと待て。」

酔っ払いの周りには誰もいない。間違いなく、今は啓一のことを呼び止めたのだろう。

だが、啓一はさも聞こえなかったかのように自転車のスピードを速めようとした。

「おい！！クソガキ！！ちょっと待てっつってんのが聞こえねえのか！？」

酔っ払いは啓一のこいでいた自転車の荷台の後ろを掴み、そのまま自転車を倒した。

当然、自転車は啓一と共に倒れ、啓一の短い悲鳴とともに音を起てて倒れた。

「この酔っ払いが…。いきなり何すんだよ！！」

「ああ？てめえが止まらねえからだろ？」

「だからって普通走行中のチャリ無理矢理押し倒すか？
酒の飲み過ぎで脳膿んでるんじゃないのか？」

「てめえ…。言わせておけば…。」

啓一の一言が頭に來たのか、その酔っ払いは啓一に詰め寄り、その襟を掴んだ。

その次の瞬間、酔っ払いは啓一によって、地面に組み伏せられていた。

じたばたして何とか啓一から抜け出そうと試みるも、足掻けば足掻くほど痛みが増してきて、どうにも抜け出すことが出来ない。

一方啓一は、しっかりと酔っ払いの肩口を押さえると、その肩を躊躇することなく外した。

「うお！」

酔っ払いのうめき声が響く。

「よっしゃ…。今のうちに…。」

啓一は、酔っ払いが地に伏せっている間に、地面に落ちてたコンビニ袋を拾いあげて、倒れていた自転車を直し、猛スピードで酔っ払いから逃げていった。

「クソ……。なんだよあのクソガキ……。人を組み伏せやがって……。」

啓一がこの場を去った後、酔っ払いはゆっくりと地面から立ち上がると、啓一が外したはずの肩をぐるぐると回し、その調子を確認めた。

「まあ…あいつはなかなか脈ありかな。」

意味深な言葉を言い残し、酔っ払いは一瞬の内にその場からいなくなつた。

酔っ払い（後書き）

いかがでしたでしょうか？
次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0625i/>

～アルセス～ 神々の物語

2010年10月9日18時04分発行